

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(45点)

そもそも、「依存」とは何だろうか。複数の国語辞典を照らしあわせてみると「依存」とは、「他のものに頼って存在していること」であり、そこにネガティブな意味合いは含まれていない。しかし、「他のものに頼る存在」のあり方に対しては、時代ごとに評価が分かれる。同じ集落の隣人の助けがなければ生きられなかった長い時代、依存の状態を問題視することなど考えられなかったであろう。持ちつ持たれつを保つていくことこそ生きることそのものであったに違いない。ところが現代の「依存」には、とかくネガティブなイメージが付きまとう。

^A ニュースで見聞きする「依存」の使われ方も、もっぱらネガティブである。病的なニュアンスを含む「依存症」はもちろん、「中国の一路政策に関するラオスの中国依存」、「マスクを外すと不安になるマスク依存」、「スマホ依存」など、「依存」は避けるべき状況を指す言葉として定着している。

ここで大切なのは、これらのケースでは依存先の選択肢が限られているという点だ。依存先の選択肢が狭く限定されると、人々は逃げ場を失い、与えられた状況に身を任せるしかなくなってしまう。選択肢があるように見えても、今の状態から抜け出すのが困難なこともあるだろう。この場合の「依存」がネガティブにとらえられるのは理解できる。

だが、依存先が一つしかないのではなく、複数のネットワークを形成していると考えればどうだろう。人々は自らの依存先を選べるようになり、争いを助長する組織にそのかさされたり、争いの原因になる他者の蔑視や排除に簡単に加担したりする可能性も低くなるのではないだろうか。そして、これまで「個人の選択」の結果として責任を負わされ、無力感を抱いてきた人も、大きな集団と向き合うコツを心得、仲間を見つけて勇氣をもてる場面も増えるのではないだろうか。

ここで私の言う「争わない社会」とは、争いや暴力が皆無の理想郷ではなく、争いの激化を予防する「依存のネットワーク」が張り巡らされた社会である。もともと、西欧で形成された国家の重要な役割は、貴族たちの不規則な暴力行使を規制し、軍隊や警察などを通じた「正統な暴力」の権限を国家に集めることで、市民社会での

①

的な争いの勃発を抑え込むことにあつ

た。ところが、国家が支配を強める過程で生じていたのは、様々な中間集団の解体であり、市民が国家と一対一の関係でつながってしまおうという権力の一元化である。そうした中で国家が自ら暴走すれば、無防備な人々は、たやすく権力に絡めとられ、争いに巻き込まれてしまう。

争いの道へと走り出す手前で、権力の集中に歯止めをかける方策を考えなくてはならない。ヒトラーやプーチンが選挙で選ばれたことを考えれば、選挙制度に頼る民主主義では、権力の暴走に十分な手当ができない。だが、たとえ争いの芽を完全に摘むことはできないとしても、争いが重症化する手前で事態を収めることなら、現代の民主主義の枠の中でもできるはずだ。

② 的に対策を講じるよりも、前もって争いを拡大しない社会を築く方法に知恵を集めるのである。

争わない社会に向けて、「依存」にこだわる理由をもう少し掘り下げてみよう。

慶應義塾けいおうの創設者である福澤諭吉ふくざわは、明治時代のベストセラー『学問のすすめ』で「一身独立して一国独立す」という有名な言葉を残し、生まれたばかりの明治国家のあるべき姿を示した。彼は欧米にならって、権威から独立した市民こそ国の礎になると考えたのである。同様の考え方は、やがて遅れて近代化を果たした発展途上国に広く普及していった。だが、この勇ましい掛け声の中で私たちが忘れがちなのは、どのような自立も「何らかの依存関係の組み合わせ」から成り立っているということである。

「依存関係」を細かく分解してみよう。そこにはまず一人の人間が織りなす様々な人間との依存関係がある。そして、それを取り囲むようにして、様々な組織や国家がそれぞれの依存関係にある。そうした依存関係が国家を超えて世界につながっていることは、ウクライナ紛争に端を発するエネルギー価格の高騰で多くの日本人が体感した。対外的な依存を減らせば、経済的な自立を高めることはできるかもしれない。しかし、世界の動向から自分たちだけを切り離すことはできない。依存を忌避する方法ではなく、依存と向き合い、手なずける方法が問われているのである。

依存は外部から持ち込まれることもある。たとえば先進諸国が行う貧しい国々への援助でも、相手国や人々の自立が強調されてきた。「魚Bをあげるのではなく、釣り方を教える」ことが自立に向けた支援であると繰り返され、日本の援助業界はこれを「自助努力支援」と呼んできた。だが、釣り方を覚えた人は釣った魚をどうするのだろうか。自分で食べきれない分はおそらく市場

に売ることになる。「自立した」釣り人は、こうして市場と貨幣の世界への依存を強めていく。

このように、一見「自立」に見えるものが実は依存先の変更に過ぎないのだとすれば、私たちはなぜその事実気づくことなく、依存を嫌い、自立を崇め続けるのだろうか。

近代以降の社会における競争や自立の強調が「依存」を遠ざけてきたのには、いくつか理由が考えられる。他者に依存する「弱み」を自覚したくない人間心理も一つの要因であろう。年金や福祉の面で国家が個人の生計に影響を及ぼす範囲が拡大してきたこともある。あるいは、個々人が社会の分業や競争に取り込まれていく中で、「仕事」が生活全体を支配し、周りの人間に頼るという行為をその範囲においてしか意識できなくなってしまうからかもしれない。

現実世界では、誰しも、頼る先を変えながら人生を歩む。赤ん坊として生まれた人間は、親に守られて成長し、学校では友人に、職場では同僚に、家庭では妻や夫に頼りながら年を重ねていく。病院の医師に頼って生涯を終える人も多いであろう。かつて助けられた人は、どこかの段階で助ける側に回り、助けた者は助けられる者になる。このように考えると、依存関係は複数に広がっていて、そこには時間を超えて循環する側面があることも分かる。

近代化に伴う個人主義の蔓延と、依存関係の重層化は表裏一体である。だが、依存の大部分は無意識の領域に属するため後景に追いやられ、代わりに **③** 的、主体的な行為である競争と協力が意識されてきた。ここで「無意識に築かれてきた依存のネットワークこそが自立の役に立ってきた」という主張を試みたところで、個人の自由意志を重んじる近代社会においてはいかにも頼りなく聞こえてしまう。しかし、ひとたび自立の土台に目を向けると、そこにある依存関係のあり方が、争いに至る可能性を左右していることが見えてくる。

依存のネットワークは時間と共に形を変える。依存関係という視点は、その意味で、歴史をどう見るかということにもかかわってくる。歴史の流れは、「建国の父」や「革命の英雄」らがつくり出してきたものではない。長編小説『戦争と平和』で知られるロシアの文豪レフ・トルストイはそう結論した。歴史の主人公として登場する軍人や政治家は、権威のピラミッドの中で高く位置しているほど、その基礎となる普通の人々から遠く離れざるをえない。しかし、現場で実際に歴史を動かすのは、これら普通

の人々ではないか、とトルストイは考えた。ピラミッドが大きくなるほど、頂点を下支えしている土台は忘れられてしまう。これが、いわゆる「トルストイの逆説」である。

今回私が試みたのは、この逆説をヒントに、国家と諸個人の「関係」に注目することである。トルストイは、歴史の底流に、歴史に名前を残さない人々の姿を見た。私は「統治する者／される者」という二項対立的な発想を超えて、多様な人間が互いの関係性を組み上げる様子を「依存関係」というキーワードで捉えてみたい。

東洋史学者である宮崎市定^{いちさだ}がこんな言葉を遺している。

いやしくも自己の記録をもつようになった文化民族ないし国家は、たがいに交通^{ちゆうたう}という紐帯によって緊密に結びつけられている。そして相互に啓発しあい、競争しあい、援助しあいながら発展してきたのである。ちょうど、スギナとツクシが地面の上ではまったく違った形を現わしながら、地下では共通の根を持っているようなものである。

私はこの一節を読んで、宮崎の言う「援助しあいながら発展してきた」という部分に、自分のこれまでの研究の焦点が合わせられていたことにハタと気づいた。これまでの研究から分かってきたのは、近代化や開発を推し進める競争や自立は、特定個人の選択肢を増やしながらも格差や不平等と表裏の関係にあること、貧困や環境破壊といった開発の副産物を手当てするはずの「援助」の背景にも様々な政治的思惑があることであった。私に欠けていたのは、まさにスギナとツクシ^Eが地下で共有の根をもっているかもしれないという想像力だった。

「地面の上」だけを見ていては物事の本質が分からない。このことを最初に教えてくれたのは、私の調査地であるタイ中西部の焼畑農民たちである。畑や森に火を放つ焼畑移動耕作は、その瞬間だけを切り出せば、周囲の自然環境を破壊しているように見える。しかし、数十年のサイクルで見れば、地味が回復した場所に再び戻っていく移動式耕作は、むしろ自然環境に適した農法である。

私たちが教わってきた近現代史は、自己と他者の違いを強調する視点に偏ってきた。その結果、宮崎の言う「共通の根」にある文化や経済が互いにどのように抜き差しならぬ依存関係にあったのか、という視点が忘却されてきたのである。「依存」は本来中立であるならば、取り返しのつかない争いへと向かわせる依存関係とはどのようなものか。

(佐藤仁『争わない社会 「開かれた依存関係」をつくる』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

問1 傍線部A「ニュースで見聞きする「依存」の使われ方も、もっぱらネガティブである」とあるが、現代のニュースではなぜ「依存」をネガティブに使うのか、その理由を八十字以内で説明しなさい。

問2 空欄①③に入る最も適切な言葉を次の(ア)～(キ)から選び記号で答えなさい。

(ア) 社会 (イ) 神話 (ウ) 意図 (エ) 偶発 (オ) 必然 (カ) 事後 (キ) 一般

問3 傍線部B「魚をあげるのではなく、釣り方を教える」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問4 傍線部C「近代化に伴う個人主義の蔓延と、依存関係の重層化は表裏一体である」とはどういうことか、説明しなさい。

問5 傍線部D「依存関係という視点は、その意味で、歴史をどう見るかということにもかかわってくる」とあるが、依存関係という視点を持ち込むことで、歴史をどう見ることができるとか、説明しなさい。

問6 傍線部E「スギナとツクシが地下で共有の根をもっているかもしれないという想像力」とあるが、それはどういう想像力を意味するのか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

二 二 次の文章は、『宇治拾遺物語』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。(30点)

昔、愛宕の山に久しく行ふ聖ありけり。年比行ひて、坊を出づる事なし。西の方に獵師あり。この聖を貴みて、常にはまうでて、物奉りなどしけり。久しく参らざりければ、餌袋に干飯など入れてまうでたり。聖悦びて、日比のおほかさなどのたまふ。その中に、居寄りてのたまふやうは、「この程いみじく貴き事あり。この年比、他念なく経をたち奉りてある験やらん、この夜比、普賢菩薩、象に乗りて見え給ふ。今宵とどまりて拝み給へ」と言ひければ、この獵師、「よに貴き事にこそ候ふなれ。さらば泊りて拝み奉らん」とてとどまりぬ。

さて聖の使ふ童のあるに問ふ。「聖のたまふやう、いかなる事ぞや。おのれもこの仏をば拝み参らせたりや」と問へば、童は、「五六度ぞ見奉りて候ふ」と言ふに、獵師、「我も見奉る事もやある」とて、聖の後ろにいねもせずして起きゐたり。九月廿日の事なれば、夜も長し。今や今やと待つに、夜半過ぎぬらんと思ふ程に、東の山の嶺より月の出づるやうに見えて、嶺の嵐もさまざまに、この坊の内、光さし入りたるやうにて明くなりぬ。見れば、普賢菩薩、象に乗りてやうやうおはして、坊の前に立ち給へり。聖泣く泣く拝みて、「いかに、ぬし殿は拝み奉るや」と言ひければ、「いかがは。この童も拝み奉る。をいをい、いみじう貴し」とて、獵師思ふやう、「聖は年比経をもたち、読み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ、この童、我が身などは、経の向きたる方も知らぬに、見え給へるは心は得られぬ事なり」と、心のうちに思ひて、「この事試みてん、これ罪得べき事にあらず」と思ひて、尖矢を弓につがひて、聖の拝み入りたる上よりさし越して、弓を強く引きて、ひやうと射たりければ、御胸の程に当たるやうにて、火を打ち消つごとくにて光も失せぬ。谷へとどろめきて逃げ行く音す。聖、「これはいかにし給へるぞ」と言ひて、泣き惑ふ事限りなし。男申しけるは、「聖の目にこそ見え給はめ、我が罪深き者の目に見え給へば、試み奉らんと思ひて射つるなり。実の仏ならば、よも矢は立ち給はじ。さればあやしき物なり」と言ひけり。

夜明けて、血をとめて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に大きな狸、胸より尖矢を射通されて死して伏せりけり。聖なれど、無智なれば、かやうに化されけるなり。獵師なれども、慮ありければ、狸を射害し、その化をあらはしけるなり。

(注) ○餌袋……旅行時に携行する食料入れ。もとは鷹の餌入れとして鷹狩に携行したもの。

○他念なく経をたもち……一心不乱に読経をして。

○普賢菩薩……釈迦の右側に立つ脇侍。仏の理・定・行の三徳をつかさどり、六牙の白象に乗った姿で描かれる。

○経の向きたる方も知らぬに……経巻の上下の向きも分からないのに。獵師は字が読めないということ。

○尖矢……矢尻が鋭く貫通力の高い矢。

○血をとめて……流れ落ちている血痕をたどって。

○慮……考えを巡らすこと。また、その考え。

問1 傍線部①～③を現代語訳せよ。

問2 傍線部Aで、獵師はどのような返事をしたのか。省略されている言葉を補いつつ現代語で述べよ。

問3 傍線部Bについて、このとき獵師はどのような事態が生じると想定して矢を放ったのか、説明せよ。

問4 傍線部(ア)・(イ)の「給ふ」はそれぞれ誰に対する尊敬語か、次の中から選び番号で記せ。

(1) 普賢菩薩 (2) 聖 (3) 獵師

問5 傍線部Cについて、獵師の「慮」とはどのようなものだったのか、本文に即して説明せよ。

次の文章は『俊頼髓脳』の一節で、冒頭の連歌の来歴について述べられたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

(30点)

重之 しげゆき

雪ふればあしげに見ゆるいこま山

幸文太 かうぶんた

いつなつかげにならむとすらむ

これは、為正が河内の守にて侍りける時、雪の降りたりける朝^{あした}に、つれづれなりければ、^①上の障子^{かみ}をたてこめて、郎党^{らうだう}どもを呼び集めて酒など飲みけるに、源重之がものへまかるついでに^②まうで来たりければ、よろこび騒ぎて饗^{きやう}じけり。おのおの酔ひて、障子^{さうじ}を押しあけて眺めやるに、雪に埋れたる山の見えければ、「あれは、いづれの山ぞ」と問ひければ、「あれこそは、高名のいこまの山よ」と為正が言ひけるを聞きて、かく申^Aしたりけるを、たびたび詠じて付けむとしけるに、いかにもえ付けざりけるけしきを見て、かくし歩きける、あやしのさぶらひの付けたり。

げに、けしきの見えて、そらしはぶき高やかにして、人よりけに居出^Bでてけしきしければ、重之見て、「幸文太こそ付けげに侍れ」と言ひければ、為正、「かたはらいたく、見苦しき事なり」と押しこめて、言はせざりければ、引き入りてやみにけり。なほ、為正、え付けでほど過ぎにければ、詫^わびて、「さば申せ。いかに付けたるぞ」と問ひければ、しばし気色^{きそく}して言はざりければ、重之、しきりに責めければ、言ひ出でたりけるに、為正、舌鳴^Cきして浅みけり。重之、聞きけるままに立ちて舞ひければ、え堪^たへで、衣脱^{きぬ}ぎてかづけてけり。^③まことに、寒げなりけるに、衣^のくれて仰^のけ張りて出で来たりけるけしき、いみじかりけりとぞ。

(注) ○源重之……平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。 ○いこまの山……生駒山。現在の奈良県と大阪府の境にある山。

○かくし歩きける……あちこちで付句を得意としていた。 ○気色……心もちを顔に表すこと。

○舌鳴き……舌うち。感嘆する気持ちを表す動作。 ○仰け張りて……上向きで胸を張って。

問1 傍線部①～③について、文脈に即してそれぞれ現代語訳せよ。

問2 冒頭の歌は、山の景色を、山の名にちなんで何に見立てて詠んだものか、答えよ。

問3 傍線部A「かく申したりける」とあるが、指示語「かく」の内容を具体的に示せ。

問4 傍線部B「けしきしければ」とあるが、誰の、どのような様子を表したものであるか、説明せよ。

問5 傍線部C「舌鳴きして浅みけり」とあるが、このような心情に至るまでの為正の行動について、本文に即して説明せよ。

問6 『俊頼髓脳』の作者である源俊頼は、八代集の一つ、『金葉和歌集』の撰者でもある。次に掲げる勅撰和歌集を時代順に並

べ、記号で答えよ。

- (ア) 千載和歌集
- (イ) 金葉和歌集
- (ウ) 拾遺和歌集
- (エ) 詞花和歌集

四

次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は辺孝先(辺韶)という人物に関連する逸話である。これらを読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で返り点、送り仮名、文章の一部を省いたところがある。(45点)

【文章Ⅰ】

(辺)韶口弁、曾昼日仮臥、弟子私嘲之曰、「辺孝先、腹便便。嬾読書、但欲眠。」韶潜聞之、応時対曰、「辺為姓、孝為字。腹便便、五経笥。但欲眠、思経事、寝与周公通夢、静与孔子同意。

③ 師而可嘲、出何典記。嘲者大慚。

(范曄『後漢書』による)

(注) 口弁 口弁に巧みなこと。

仮臥 横たわって寝る。

便便 肥満したさま。

応時 ただちに。

経事 儒教(経典)の教え。

周公 孔子が理想とした聖人。孔子は夢で周公に会うことを願った。

【文章Ⅱ】

人有嗜睡者、辺孝先有此癖。近時張東海有『睡丞記』一言、「一
 華亭丞、謁郷紳、見其未出、座上鼾睡。頃之、主人至、見客睡、
 不忍驚、对坐亦睡。俄而丞醒、見主人熟睡、則又睡。主人醒、
 見客尚睡、則又睡。及丞再醒、暮矣。主人竟未覺。丞潜出、主
 人醒、不見客、亦入戶。」世有此可笑事。

陸放翁詩云、

⑥ 相對蒲団睡味長
 主人与客兩相忘
 ⑦ 須與客去主人覺
 一半西窓無夕陽

此詩殆為此丞發耶。

(謝肇淪『五雜俎』による)

(注)

張東海 〓 人名。

睡丞記 〓 書名。

華亭丞 〓 華亭県の次官。

郷紳 〓 その土地の名家。

軒 〓 いびき。

陸放翁 〓 人名。

睡味 〓 ねごち。

須臾 〓 しばらく。

問1 波線部①「私」、②「対」、③「俄」の読み方を送りがなも含めてすべてひらがなで記せ(現代仮名づかいでもよい)。

問2 辺孝先は、傍線部①「腹便便」と批判されたが、どのように弁解したか。二十字以内で説明せよ。

問3 傍線部②「寝与周公通夢、静与孔子同意。」について、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ(現代仮名づかいでもよい)。

問4 傍線部③「師而可嘲、出何典記」について、わかりやすく現代語訳せよ。

問5 傍線部④「見其未出」は、「そのいまだいでざるをみて」と読むが、この読み方に従って原文に返り点をつけよ。

問6 傍線部⑤「世有此可笑事」について、その可笑しさはどこにあるのか。七十五字以内で説明せよ。

問7 傍線部⑥「主人与客両相忘」と傍線部⑦「一半西窓無夕陽」について、その状況に対応している一句を【文章Ⅱ】の本文から、それぞれ三字以上六字以内で抜き出せ(句読点は含まない)。